

天草島の土地利用について

平川公明*

HIRAKAWA, K. The Land Utilization in the Amakusa Island

最近の稲作増収について 最近熊本県では、天草郡の飛躍的稲作増収が話題になっているが、このことは例えば旧城河原村の如き 28 年度において 300%以上の供出実績を残したことから容易に想像出来ると思う。処でこの天草郡は耕地面積 14000 町を有し熊本県耕地の約一割を占め農業上極めて重要な位置にあるが従来いろいろな特殊事情により農業生産は極めて低く余り期待されなかつた。例えば県平均 3 割 7 分の自給農家に対し、天草郡は 7 割 1 分という結果からもその零細経営の程が伺われる。そしてこの飛躍的稲作増収が 2 条培土栽培の導入によつてなされたことは既に周知の通りであり、これに関する技術的問題については去る 4 月のこの研究発表会の席上「天草郡における 2 条培土栽培」の題名において詳細に発表がなされた処である。処で天草郡における稲作増収が 2 条培土栽培によつてその口火が切られたことは事実としても、各種改善技術が組合されてこの成果を収めたことは農家自体も充分これを認めるところで 6ヶ村 100 人余りのアンケート調査では第 1 表の如く 2 条培土栽培そのものに関心をよせ効果を認めている者が多いようであ

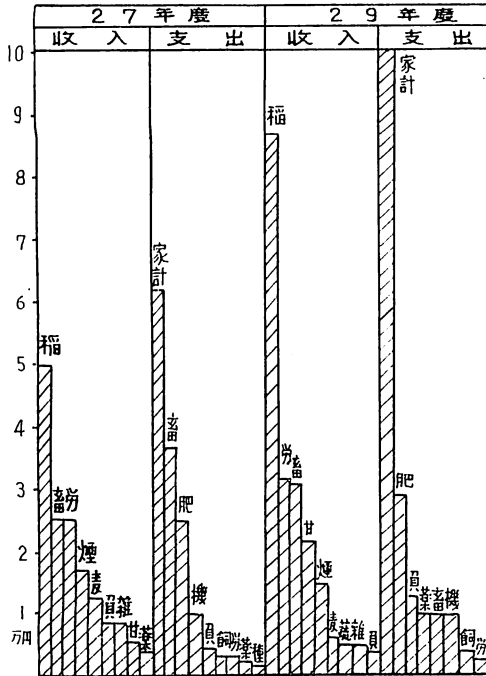
第 1 表 水稻のどんな技術に関心をもち且つ効果を認めたか

改 善 技 術	回 答 者 数	改 善 技 術	回 答 者 数
二 條 栽 培	56	培 土 の 実 施	32
本 田 の 元 肥	53	追 肥 の 量 と 時 期	26
本 田 の 防 除	53	掛 乾	24
苗 代 の 防 除	42	田 植 法	24
種 子 消 毒	39	苗 代 日 数	22
品 種 の 選 定	37	株 数 の 増 加	22

るが、次いで施肥改善、病虫害防除の効果を認識し更に品種の選定等が重要であることを示している。即ち総合された技術がこの輝かしい増収成果をうちたてたものと思われる。処でこの稲作増収は如何に農家経済に影響したであろうか、8 農家について詳細に調べてみよう。第 1 図は 27 年度の増収前と 29 年度の増収後の変化を示したものであるが 29 年度において平均約 6 万円の収入増となつている。これは勿論水稻を筆頭に労賃、家畜、甘藷各収入の増加をもたらし、このうち家畜収入は幾分飼育頭数の増加によるとしても労賃増加は稲作増収により安易に冬期出稼ぎ労賃を志すも

* 熊本縣農業試験場

第 1 図 27, 29 両年に於る項目別収入支出の変化



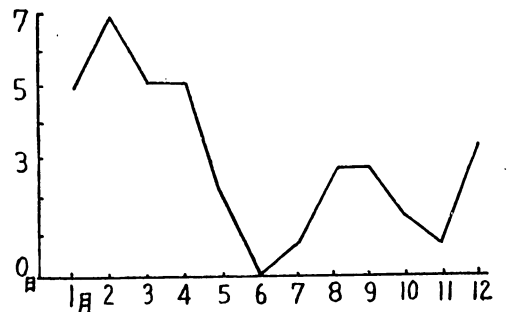
のと思われまた甘藷は施肥技術並びに適正なる管理作業により増収するものと思われた。2条培土栽培施行後、稲作管理の適正により水稻に於ては8月の農作業を殆んど必要とせず畑作方面へ向けられる為他部門にまで好影響を及ぼしている。また注目すべきは負債が著しく減少したことである。家計費は収入の増加と共に倍加しまた薬剤散布の増加により農薬代を4倍につり上げた。このように稲作の増収は農家経済に直接、間接大きな波紋をなげかけているがこの傾向は水稻に対する依存度の高い処、即ち大抵水田率の大きい地帯並びに経営面積の広い安定した農家において著しいようである。

畑作及び水田裏作の利用について 処で天草郡における畑作及び水田裏作等の耕地利用状況はどうであろうか。郡平均一戸当耕作面積 4.8反という零細経営にもかかわらず耕地の利用度は真に少く反省すべき問題を残している。例えば天草郡でも蔬菜園芸が割合広く行われている旧志岐村においてすら畑の作付様式は全畑地の9割以上を麦一甘藷の簡易な作式で占めると云われ1毛作田は全水田の半分に及んでいる。そして気象的に極めて恵まれた本郡でありながら耕地利用率は1.82に過ぎない。これらの理由については水田裏作の場合殆んど水田そのものが柵田を形成し河川、溜池も

小さく灌漑水に乏しい結果強固な床締めを行い用水を温存する為冬期には排水不良となり温暖な気象条件は雑草繁茂を増長し耕地の高度利用を阻害しているものと思われる。また畑地では農道の不備、傾斜、日影地が多く作物の生育を阻害するのは勿論のこと、農作業を困難ならしめ徒に時間と労力を費し苦勞の割に成果の少い農業を形成していると云わなければならない。このことは耕地の高度利用を阻害する要因を調べたアンケート調査中「労力不足」という原因をあげた農家が案外に多くこの零細経営の中に於て如何にムダな時間を費しているかが伺われた。

また特に天草郡に於ては出稼ぎ賃労働がこの耕地高度利用を阻害する大きな要因となつていることに注目すべきである。6ヶ村100人余りのアンケート調査では年間40日以上の出稼ぎとなり8農家の実態調査では実に70日以上に達し第2図で示す如く水稻の生育期間を除き常に出稼ぎが行われそれが殆んど経営主であることが判明した。即ち冬期間に於ては殆んど経営主は家を留守にし、もつぱら賃労働に専念するものと思われる。そしてこのことは耕作面積の減少するに従い倍加するものであろう。これを種類別に見ると大工、左官、山仕事、漁業、石工、土方等多種多様であるが子供時代から習いおぼえの技術を生かし今更ら捨去るのは惜しいという考えを以つて、手軽な賃労働へ走るものと思われた。また周囲を海で囲まれ漁業方面の出稼ぎ、割合豊富な山林資源、特に炭鉱等も10数ヶ所を数えこれらに伴う出稼ぎ機会に恵まれていることも見逃せまい。そしてこの傾向は耕地の高度利用が行われない地帯において益々増加するものと思われ賃労働故に天草の農業はその発展を阻害されている面が大きい。

第 2 図 月別出稼ぎ労働日数



結び 以上私は2~3の調査を基礎に天草郡の農業事情を解明せんとした。最近における水稻の飛躍的増

収が農家経営に及ぼした影響は実に大きいものがあるが、未だ水田の少い大江村の如き年間数千万円の赤字が続出していると云われ広大な畑地或いは水田裏作の利用が充分活用されていないことを物語っている。近時天草農業収入の重要な一角を成す和牛生産価格の暴落と出稼ぎ賃労働機会の縮小により、水稻生産が向上且つ安定したとは云え全般的には決して樂觀をゆるさ

ぬ段階に立至つた。この上狭い島内では天然資源にも限度があり漁業方面もまた余り順調でないと聞く。この秋に当り恵まれた気象条件を充分活用した農業生産形態を確立し、即ち耕地の高度利用を行いあらゆる難関を乗り越え零細経営を安定させることこそ天草農業に課せられた使命と痛感される。